

ら借用したものである。すぐれて社会的物である世論はそれ故に権威の源泉である。するとすべて権威は世論のつくりだしたものとなるのではないかとの自問がおこる。ところが一方科学は世論の敵対者で、その誤謬を訂正しているのではという反論も生じてくる。科学が世論を訂正するにも充分な権威をもたねばならず、しかもこの権威は世論からしか得られない。民衆が科学に対して信頼をもたない時は、あらゆる科学的証明は彼等の精神に影響を与へることはない。⁸⁶⁾ こうしてデュルケームは科学の受容の社会学について重要な主張をのべるが、この科学の社会的受容はそれと集合意識との分離の可能性として考えられている。デュルケームは科学者の世界の権威には特殊性を与えていない。ここでわれわれは用具と概念の区別についてのデュルケームの比較に戻らなければならない。なぜならこの比較は知識を集合意識の感情性だけによって支配される「試行錯誤」による累積としているから、異論をひきおこし易い。科学的知識の累積は集合的記憶の累積の規則とは別の規則に従うからである。しかしデュルケームの頭には科学の社会学がつきまとい、科学の社会学によって「宗教生活」の中の知識社会学は終わっているのである。ところで、認識論という科学の社会学の一部は知識の社会学理論にとっては矛盾である。なぜならそこには科学的知識の社会的構成ではなく、個人的構成があるのみであるからである。個人、個人の思考作業の練成の結果である科学に関する理論は集合意識の理論とは別物であるにもかかわらず、彼はそれを同一視する傾向を見せている。「宗教生活」の結論の章でデュルケームはその区別をしながら、そこに近づいている。⁸⁷⁾ G. Namer はその間に多元的決定の作用があると見るが、⁸⁸⁾ とにかくデュルケームにおいて両者の区別が忘れられて科学の権威も集合意識の一つの様態 Modalité であると見られるのである。「宗教生活」の結論においてデュルケームは「概念が社

会が事物を表象する仕方であるということは、また概念思考が人類の文化がかなり進んだ段階における所産であるとするを拒否するものである」⁸⁹⁾ とのべている。デュルケームの考え方にはこのようになり変容が含まれているのである。そして知識社会学の最終の変容は死後刊行された *Pragmatisme et sociologie* に現れている。彼はこの書で知識社会学の循環的特性を明かにしながら「私は観念論者たちのいうように起源において思惟があったとも、プラグマチストのように起源には行為があった」ともいわない。デュルケームはプラグマティズムの力動性と行為は思考と分離できないという考え方を借用して「結局現実 le réel をつくり出すのは思考であり集合表象のすぐれた役割はこの社会という優越した現実をつくり出すことである」⁹⁰⁾ といひ、循環的図式な視野を導入しているのである。真理は社会的構成であるが、同時に知識は知識による社会的構成であるとする見方はさらに歴史的視野によって拡大される方向に向けられていたのである。

IV (結び)

デュルケームの知識社会学の問題に関して W. S. F. Pickerling の最近の論文が提起した問題に答えるため、筆者は Pickerling の要旨と彼およびその一派の人びとによっては何故か取りあげられこなかった G. Namer の論文について問題点を上述してきた。デュルケームの戦前からの高弟であった G. Davy はデュルケームの「社会学講義」への序文で科学 science は le social (社会の本質) とともにその理論の二つの大きな主題であった」とのべている。⁹¹⁾ デュルケームの「社会学と諸社会科学」の中の社会学の領域の分類図⁹²⁾にも知識社会学という名称は出てこない。しかしダヴィのいうように知識科学はあらゆる著作において用いられている用語である。筆者もかつては「分類

86) 「宗教生活」 p. 298

87) 「宗教生活」 p. 225

88) G. Namer, *op. cit.*, p. 74

89) 「宗教生活」 p. 626

90) *Pragmatisme et sociologie* p. 159

91) G. Davy, Introduction. à *Leçons de Sociologie* p. XII

92) デュルケーム「社会学と諸社会科学」デュルケーム(拙訳)「モンテスキューとルソー」に含まれている。